三、医療史に支えられて時代小説・歴史小説をかく

篠田達明
作家・愛知県心身障害者コロニー名誉総長

一・医療史とのかかわり

一九七〇年代の大学紛争のさなか、障害者の入所施設や作業所、職業訓練校、病院、研究所、養護学校などを備えた心身障害者のコロニーに勤めることになった。勤務当初から、人里離れた場所に大規模な施設を建設してそこに障害者を集めることに対して異論があった。障害者の療育をおこなうには、住み慣れた町や村で地域の人に支えられながら地域で自活できる小規模なシステムのほうが望ましいのではないかという議論である。そこで障害のある人たちは歴史的にどのような処遇をうけていたかを知る必要に迫られ、医史学会に入会して障害者の医療史を紐解くことになった。

江戸時代の国学者で小児科医だった伊勢松阪の本居宣長が著書『古事記伝』の中で「ひるこ」という重症心身障害児について記述していた。ひるこは、いざなぎの命・いざなみの命の第一子だったが、生まれつき蛭のように全身がなよなよとした重度の障害児だった。三歳になっても起立歩行ができなかったので、両親はひるこを葦の舟に

のせて川へ流し棄ててしまった。

第一子に障害のある子が生まれ、その子を遺棄するという伝説は全国各地にみられる。現代でも二十世紀後半まで最初にみごもった胎児と母親との血液型不適合で分娩後、核黄疸が生じて脳性麻痺を発症するケースがあとをたたなかった。古代においても第一子に障害児ができやすい事実が経験的に伝えられ、ひるこの物語がそれを代表するかのように『古事記』や『日本書紀』の中で語られたのであろう。このような重い障害児が現実にわたしの働く施設に大勢集められて療育活動をうけていたので、いっそう医学の歴史に興味を抱くようになり、医療史の広さ、深さを知った（なお二十一世紀の今日、全国の大規模な障害者コロニーは縮小または廃止され、各地で在宅を中心とする地域療育がひろがりつつある）。

二．吉村昭氏の作品を知る

障害者の施設で働くのはなにかと荷が重い。余暇になにか楽しみがなくてはと思っていたところ、歴史好きな整形外科の先輩から、吉村昭著『日本医家伝』の存在を教えられた。そこに描かれた山脇東洋、前野良沢、伊東玄朴、土生玄碩、松本良順、相良知安ら、錚々たる医人たちの生きざまにひきつけられた。ことに松本良順や相良知安の、歴史の裏街道をゆくような波乱に満ちた生涯と、かれらの強い個性に興味を抱いた。こどもの頃から芝居が好きで、演劇サークルにはいったり、ドラマやシナリオをかいたりしたことから、これらの人物を小説にしてみたいという思いに駆られた。

その後、数篇の医療時代小説を手がけた。最初は江戸の眼科奥医師土生玄碩が白内障手術のために「はしりどころ（開瞳作用のある薬草）」の存在をシーボルトに求めるかけひきを題材に「本石町長崎屋」という短編をかいて「小説サンデー毎日」の懸賞小説に応募したところ佳作になった。

つぎにわが国では江戸時代から木床義歯に精巧なものがあるという資料から口中医を主人公に「大御所の献上品」という短編をかいたところ、小松左京氏の推薦で「オール読物」に掲載され、これが直木賞候補に選ばれた。

さらに夏目漱石の三女が生れるとき、産婆さんが間に合わず、漱石が分娩介助をせざるをえなくなった事実を文芸春秋の随筆欄で知り、「にわか産婆・漱石」という小説をかいた。おそらく漱石は分娩介助をするとき、ずいぶん慌てたにちがいないが「草枕」に一行あるだけで、このことをほとんど記録していない。漱石の身になってわが子の分娩の一部始終を小説にしたところ、「歴史読本」に採用され、歴史文学賞を受賞した。

これらの作品を著すに当って多くの医療史関係の文献や資料に支えられた。当時の医療は一般の人にとって窺うのがむずかしい専門分野で、がんの告知やインフォームドコンセントもなく、いわゆるムンテラが主で、治療となれば「先生にすべておまかせします」といった「おまかせ医療」が横行していた。医療時代小説をかこうとしたのは、吉村昭氏や渡辺淳一氏らの作品以外には、この分野の作品がほとんどなかったことと、自分が経験した診療の詳細や手術法を時代小説に取り入れて医療の世界の一端を一般の人にわかりやすく伝える橋渡し役になろうという、いまにして思えばおこがましい限りの気負いがあったからである。

三．小説執筆のための基本的な医史文献

基本的、総合的な文献として富士川游先生の『日本医学史』、服部敏良先生の各時代の『医学史の研究』、日本医史学会編『図録日本医事文化史料集成』、小川鼎三先生の中公新書『医学の歴史』、中野操先生の『日本医事大年表』、日本学士院編『明治前日本医学史』などを手元におき、たえず参考にした。

各人物の文献としては、松本良順を主人公に『空の石碑』という作品を著したとき、小川鼎三先生・酒井シヅ先生校注の『松本順自伝』（東洋文庫）、鈴木要吾著『蘭学全盛時代と蘭畴の生涯』、村上一郎著『蘭医佐藤泰然』の

三冊を柱にすえた。

すでに司馬遼太郎が朝日新聞に連載した『胡蝶の夢』があったが、小説の後半は良順よりも関寛斎に焦点が移り、なおかつ良順は司馬氏が描いたよりも、もっと江戸っ子らしい闊達な人物ではないかと思い、折りにふれて良順のことを調べた。

良順の活躍した場所は歴史上、広範囲におよぶので、全国各地にまたがるかれの足跡をたどった。良順が青年時代に父の佐藤泰然から手術の手ほどきをうけた佐倉順天堂、江戸の西洋医学所や漢方の医学館（漢方の試験をうけた）のあった神田和泉橋界隈、オランダ軍医ポンペの教えをうけた長崎の町、近藤勇や土方歳三の依頼をうけて新選組の健康診断をおこなった京都の西本願寺、会津戦争の救護に駆けつけた会津藩の日新館（現在市郊外に復元されている）、良順の祖父の里、山形県鶴岡市、リウマチをわずらった良順が静養した湯野浜温泉、榎本武揚の率いる幕府艦隊が集結した松島湾の中の寒風沢島、良順がお尋ね者となって潜伏した横浜の外人居留地、終焉の場である大磯（墓は同地の妙大寺、この寺と海辺に空の石碑あり）と年月をかけて取材した。

先年、吉村昭氏が朝日新聞に『暁の旅人』と題して松本良順の小説を連載したときは地図を片手に、良順の足跡を追った。なお平成十九年は松本良順没後百年に当たり、東京で耳鼻科を開業しておられるご子孫の松本和彦先生が大磯で良順没後百周忌を営まれた。同氏には本シンポジウムの際、はじめてお会いしたが、良順にそっくりの風貌をされているのにはおどろいた。

北里柴三郎についても『戦う医魂』という小説を文芸春秋社から上梓した。安藝基雄先生が「医史学雑誌」に発表された「大正三年の所謂『伝研移管問題』について」が興味深く、この論文に触発されて北里柴三郎の伝記を集めた。こどもの頃知った人物とはちがうスケールの大きな北里の魅力に惹かれ、熊本の北里柴三郎記念館にも訪れ、医師の仕事だけでなく、政治家、企業家として闘志に満ちたかれの生涯の一端に触れることができた。

大坪元治先生の『眼鏡の歴史』をよんだとき、明智光秀が用いた眼鏡の伝説があると記されていたことから、想像をふくらませて「明智光秀の眼鏡」という時代小説をかいた。神奈川の中村昭先生が「日本医史学雑誌」に発表された「『明月記』における瘧疾の検討」にて藤原定家がマラリア三日熱の発作で苦しんでいたことを知り、先生におことわりして「マラリア明月記」と題した短編小説をかき、「週刊新潮」に載せてもらった。また京都の脳神経外科医新島掌一先生からは、上杉謙信が四十九歳で倒れたのは高血圧性脳出血ではないかとのご教示をうけ、先生の説をもとに「芸術新潮」にエッセイを登載した。最近では「新潮45（平成十九年四月号）」に載せた「武田信玄病死ミステリー」で杉浦守邦先生の「カルテ拝見 武将の死因」を参照させていただいた。

四．ご子孫に支えられた医療歴史小説

（一）ドイツ医学を導入した旧佐賀藩医 相良知安

医療歴史小説では、多くのご子孫にお世話になった。

ドイツ医学を導入した旧佐賀藩医相良知安についてはすでに吉村昭氏の短編があるが、これを長編小説にしたいと考えた。知安は当時のドイツ医学がぬきんでていることに気付き、明治二年のドイツ医学採用に貢献したのだが、明治三年十一月、部下の不正経理事件の責任をとらされて突然、弾正台に拘留された。未決囚のまま一年二ヵ月たってようやく釈放されたが、その後医療界に背をむけ、大道易者をして生計をたてた。転々と住まいを変え、最後は芝神明町の裏長屋に住んだ。七十歳で肺炎をおこし、あばら屋でわびしく死んだ。知安と同じ医学取調べ御用役だった越前藩の岩佐純が温厚な人で天皇の侍医にまで昇進したのに対して、知安は我が強く、いいだしたら利かない、敵をつくりやすい猖介な性格で、そのために晩年はみじめな人生を送ったことが小説の格好の題材となると思った。知安の故郷である佐賀へゆき、ご子孫で八代目の相良隆弘氏にお会いして、氏から多くの文献と資料の

提供をうけた。おかげで知安の生涯を『白い激流　明治の医官・相良知安』と題する歴史小説（ＮＨＫ出版刊）にまとめることができた。

相良知安については地元の医科大学で医学生に講演したあとで、「ドイツ医学導入の功罪」、「医学生が医学史を学ぶ意義」について討議してもらい、これをレポートにしてもらった。かれらのレポートから、「自分たち医学生はとかく過去をふりかえる機会に乏しいが、歴史をたどることは過去にまなび、未来への糧とする方法であり、現在おこなわれている医療は先人たちの業績の積み重ねの中から工夫と改良をくわえた結果である。先人たちの努力のあとをふりかえることは、自分たちの仕事の位置づけでもあり、同時に、自分たちは現在の業績をつぎの世代にうけわたす義務がある。また、このことは歴史の創造に参加することでもある」という主旨を学生たちが理解してくれたように思った。

（二）女性排卵日を世界で最初に確定した荻野久作博士の伝記小説

一九八〇年代後半、静岡市で脊椎外科の研究会が開かれた。そのあとの懇親パーティの席上、当時の東京心身障害児総合医療療育センター所長の坂口亮先生から「荻野久作の伝記をかいてみませんか」と声をかけられた。オギノ式の荻野博士といえば、「女性の排卵は月経の後におこるのではなく、月経前の十二日から十六日の間におこる」という人類普遍の法則を発見した偉大な産婦人科医である。その画期的な理論は世界中に認められたのだが、有名なわりにはどんな方なのか、まったく見当がつかない。

坂口先生が仰るには、荻野久作は坂口先生の大叔父に当るが、新潟の一介の開業医におわったため、その業績が埋もれている。医学部の教授であれば、弟子たちが業績集などを出版して功績が讃えられる。しかし在野の久作にはそのようなこともなく生涯をおえた。伝記を執筆していただければ、大叔父もうかばれるかもしれないと坂口先

生は語った。

だが、わたしにとって未知の人物の伝記をかくのは荷が重く、腰が引けた。そこで荻野博士とそのご家族の日頃の様子とか、くせ、からだつき、話す様子など、人物の一覧表をつくってくだされば、なんとかしてみましょうと難題をだしたところ、後日、坂口先生から荻野博士の生前とご家族の方々を髣髴とさせるキャラクターが詳細にかかれた一覧表が送られてきた。次第に逃げられなくなった。

このとき偶然、わたしの職場の小児科医が荻野博士が働いていた新潟の武山病院の二代目院長さんと新潟大学で同級生だとわかった。そこで竹山病院から荻野博士が働いていた当時の病院の見取り図や貴重な資料の提供をうけた。さらに荻野博士はわたしの地元である愛知県の豊橋市出身だったことなどから次第に荻野博士の人物像がうかびあがるようになった。

荻野久作は十九歳で三河西尾藩の元漢学者荻野家に養子入りして、一高から東京帝大医科大学に入学した。卒業後は東大の産婦人科教室に入局したが、まもなく新潟の私立竹山病院に就職した。診療のかたわら新潟大学に通って黄体の研究をおこない、次回月経を基準にして排卵日を究明し、排卵後にできるヒト黄体の寿命を明らかにした。いわゆるオギノ式避妊法は他の産婦人科医たちによる荻野説の応用であって、決して久作が提唱したものではない。オギノ式だけはローマ法王庁が例外として認めた唯一の避妊法となった。

こうしてさまざまな人たちの助けをかりて小説『法王庁の避妊法』ができあがり、「別冊文芸春秋」に登載してもらうことができた。その後、荻野久作博士の次男で故荻野博先生のご子息荻野厚氏からも多くの資料や文献を頂戴して、単行本として上梓することができた。

世界で最初に乳癌患者に全身麻酔をおこなった華岡青洲は、麻酔という地味な分野の医師だったが、作家、有吉佐和子によって小説『華岡青洲の妻』が発表され、これが映画や舞台やテレビドラマとなり、日本中に知られるよ

うになった。『法王庁の避妊法』もテレビドラマ化され、鹿賀丈史、南田洋子らの出演で二時間ドラマとして放映された。また勝村政信、稲森いずみらの出演でホリプロにより舞台化され、ＮＨＫ衛星テレビで舞台中継もおこなわれ、荻野博士の業績は次第に知られつつある。かつて一般の人と専門的な医療との橋渡しをするという思いを抱いたが、この小説によってその思いがかなえられたと感じた。なお、女医としてわが国で三番目に資格を得た高橋瑞子は、荻野久作の義理の叔母にあたり、二人は密接なかかわりをもっていたことから高橋瑞子についてもその伝記をほりおこしたいと考えている。

医療史に支えられて時代小説・歴史小説や医学エッセイなどをかいてきたが、多くの作品は吉村昭氏の評伝をはじめ、多くの先人の業績なくして著すことはできなかった。医療史は題材の宝庫であり、奥深く豊富な世界が広がっている。しかも高齢化社会を迎えて、ますます医療問題には多岐にわたるテーマが生まれている。これからも医療史に支えられて歴史的に虐げられた人々、日の当らなかった人々に目をむけ、死ぬまで医療小説をかきつづけてゆきたいと思う。

文献

（1）篠田達明「日本心身障害医学前史（一）古代編『日本医史学雑誌』二四巻（二号）四八～五〇頁、一九七八
（2）篠田達明「作家を志すあなたへ」『日本医事新報「ジュニア版」』No.二一四（七月号）一九八二